
ゼロと吸血鬼

TARUT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロと吸血鬼

【Nコード】

N4987BA

【作者名】

TARUT

【あらすじ】

東方Projectからレミリアさんが召喚されるお話。東方とゼロの使い魔のクロス作品な上に、設定等が間違っている場合がございますので、見る際にはご注意ください。

プロローグ

どたばたとうるさい音が外と廊下、両方から聞こえる。

あまりにも騒がしいせいで、思わず目をあけた。

カーテンの隙間から見える忌々しい日の光は、今日の天気を教え
てくれる。前まで窓が無かったのだが、最近自室で月を見ながらお
酒を飲むのに凝っていて付けたのだ。

広いベッドに座って目を擦り、ぼやけた視界をはつきりさせて、
私はメイドが来るのを待とうとした。

しかし誰も来ない。

ああ、そうか。

よく考えてみれば、普段ならもっと遅い時間に起きるから、呼ば
なければ来ないじゃないか。まあ騒がしいのは白黒あたりがきてい
るんだろう。となると咲夜は応戦しているか。

私は迷った拳句、クローゼットから服を取り出し一人で着替える
ことにした。

そういえば、一人で着替えるのは久々だ。

鏡に映らない私は服だけならともかく、細かい身だしなみとなる
と一人では大変。だから、大抵メイドに任せている。

「帽子かぶれば寝癖はある程度平気かしらね。後でメイドに……っ
て、あら」

今の今まで気づかなかったのか、クローゼットの隣に鏡らしきも
のが置いて 非、浮いていたのだ。

なに、これ。

鏡　　だろうか。それにしても私の姿だけでなく他の何も映していない。ためしに突いてみてみたが、水面のように波紋が広がるだけ。

咲夜なら何か知っているかもしれない。私はテーブルの上に置いてあるベルをちりんと一回鳴らした。

「失礼いたします」

涼しげな声がドア越しに聞こえる。入ってきたのは銀色の髪に整った顔立ち、そしてメイド服を身にまとった、私の自慢のメイド。

「おはようございます。今日はお早いですね」

騒がしかったから目が覚めたと私が言うと、メイド　　咲夜は申し訳なさそうに頭を下げた。

「ところで、咲夜はアレ知ってる？」

と、従者に対して聞いてみても彼女も何もわからないようで首をかしげていた。

「鏡、でしょうか」

「どうも違うみたいなのよ。なんか変な力を感じるし……ほら、触ると水面みたいに」

さっきみたいに鏡に手を入れてみると、突然体が鏡に引きずりこ

まれるように手が引つ張られた。

「ちょ、ちよつと、何よ!」

私は必死に床に足をめり込ませ耐えるが、吸血鬼の力を持ってしてもゆつくりと鏡に引きずり込まれていった。

「……っ、お嬢様!」

咲夜が我に帰ったときには、半分以上吸い込まれていた。

咲夜が私の手を掴もうとしたときにはすでに遅く、掴もうとした手が空振り、私の身体は鏡の中へと吸い込まれていった。

私、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは 焦っていた。

今日はトリステイン魔法学院の春の日の使い魔召喚の儀。私たちが二年生のメイジが進級する際、使い魔を召喚する儀式。

しかし、広場にいるのは私と担当の先生であるミスタ・コルベールだけ。

クラスの皆が私のことを嘲笑っていたのは、何時のことだっただろうか。

ライバルだったツエルプストーが望みどおりの使い魔を召喚し、勝ち誇った笑みを浮かべていたのは何時だっただろうか。笑い声がとまり、同情するかのような目で見ながら使い魔を連れ帰っていったのは、何時だっただろうか。

皆はずでに帰っており、次の授業の準備及び、使い魔との交流を

深めているだろう。

その代わりと言ってはなんだが、私の周りには失敗の爆発で抉れた穴が無数にある。

「ミス・ヴァリエール。続きは明日にでもやりましょう。貴方ががんばっていることは私も知っています。私からも学院長に話をしてみますから」

「もう少し、後一回だけお願いします！」

「……分かりました。後一回だけです」

「ありがとうございます！」

集中よ、集中。大丈夫。ゼロなんかじゃない。私は誇り高きヴァリエール公爵家の三女。

「宇宙の果てのどこかにいる、私の下僕よ！」

始祖ブリミルよ。

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！」

竜やグリフォンみたいな強力な使い魔でなくともいい。私がゼロじゃなく、メイジであるという証拠が欲しい。

「私は心より求め、訴えるわ。我が導きに応えなさい！」

これが最後という覚悟を込め、私は全身全霊をかけて詠唱して杖を振り下ろした。

その瞬間、今日で一番の爆発音が鳴り響いた。

「げほ、げほっ」

使い魔は、使い魔はどうなったんだろうか。私は煙に咽ながら辺りを見回した。すると土煙の向こうに見え隠れするのは、小さな影だった。

もしかしたらもしかするとだろうか。

「ミス・ヴァリエール！ 大丈夫ですか!?!」

先生の声が聞こえる。だが、私はその影の姿を見るのに夢中で、返事をするのをすっかり忘れていた。

煙が薄れていくうちに、私が呼び出したらしき使い魔の姿が見えた。それは、ピンクのドレスに水色の髪をした私より小さな女の子だった。

「これが、私の」

「ミス・ヴァリエール、離れなさい!」

その子に手を伸ばそうとした瞬間、先生が私の前に立ち、杖を構えた。

「あ……」

その子の背中には自身の背丈よりも大きい蝙蝠のような黒い羽が

生えており、人でなく亜人だということが分かった。

「み、ミスター・コルベール、わわ私は亜人を召喚したんでしょうか!？」

「そう、なのだが……」

先生の歯切れの悪い返事と、その後に繋がった言葉に、私は眉をひそめた。

「サモン・サーヴァントは成功したのはいいのだが……。コンタクト・サーヴァントはもう少し待ってくれないかね、ミス・ヴァリエール」

「なぜですか!」

納得のいかない苛立ちと不安が込みあがってくる。サモン・サーヴァントが成功したなら、次はコンタクト・サーヴァントをするのが普通だ。

「私はある程度の知識を身につけているつもりですが、こんな亜人見たことも、聞いたことも無い。そしてあの黒い羽……。あれはまるで」

「う、うーん、あれ、私さっきまで部屋にいたのに……」

悪魔、というかすれた声と一緒に、亜人からうめき声のようなものが聞こえた。私のはつとしてそちらを見ると、頭を抑えながら亜人の女の子があたりをきよるきよる見回していた。

「ミスタ・コルベール。彼女と契約します」

「な、危険です！」

「でも先生は先ほどやり直しを要求した生徒に言いました。召喚の儀は神聖なもので、やり直すなど儀式そのものに対する冒瀆だと」

「そ、そうですが、先ほどディテクトマジックをかけたところ、人間では考えられない程の力が」

「それでも私には後がありません！」

もう後はないのだ。本当に後がない。本当に最後のチャンス。私を止める先生の声を無視し、召喚した少女へと向かった。

「貴方が、私の……」

少女の周りは赤い霧のようなものが漂っていた。私は腰を落とし少女の顔を覗き込む。紅い瞳の焦点が合わさると共に、私は詠唱をはじめめる。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

習ったとおりに杖を彼女に向け、ゆっくりと彼女の唇に自分の唇を合わせる。

だが、頭が白く伸びた指に掴まれ、私の唇から離れた彼女の唇が、私の首筋にいった。突然の行動に私は彼女の手を離そう掴むが、指

も腕も動かせない。

そして次の瞬間、首筋に何かが埋まるような鈍い痛みと、不快感が続いた。水を啜る音と共に、鉄錆の匂いがする。

少しずつ顔が離されていき、そのときようやく何をされたのかわかった。

彼女の口元にはべっとり赤い液体　血がついており、その口元からは、鋭い牙が見え隠れしていた。

「うう、不味いわね」

彼女は思いきり顔を顰めてながらそう言った。

「きゅ、吸血鬼！　わわわ私、血を！？」

「ああ、もう、ちょっと血い吸ったくらいで喚くな！」

「ででででも！」

「本当に騒がしいわ。その程度じゃ何にもならな　いつ！？」

突然彼女は左手を抑えた。その手の甲には鈍い輝きと共に使い魔のルーンが刻まれていた。

輝きがとまり、彼女が落ち着いたように息を吸う。その様子に私はホッとした。

何せ相手は吸血鬼だ。サモン・サーヴァントに応えたということ、自身の意思で使役されることを了承しているわけだし、ある程

度は安全だと思つ。けれどももし怒らせて気が変わる事になれば、魔法の使えない私じゃいくら命があつても足りない。

だが次の瞬間、彼女の手が私の首を掴んでいた。

「何をした」

紅い瞳の中の、肉食獣のような縦に裂けた瞳孔が私を捉える。私は小さく悲鳴をあげ、身体を竦まることしかできなかった。

「そこのハゲ。何かしようとしているのは分かつてる。そして、お前が何かをするのと私がお前の首を潰すの、どちらが早いのかお前は”分かつて”いるだろう?」

彼女はにやりと口の端を吊り上げた。そして私の方を向き、目と目が合う。

「おい、小娘。私の手に刻まれた文字は何だ」

正直怖い。

「そ、それは使い魔のルーンよ。私の使い魔という証のようなもの」

私の答えを聞くと、ふうん、とか、へえ、などに関心したような顔をしていた。

「な、何よ!」

「ということは、あの鏡はゲートだったのね……。向こうからしたら私が知ってて来たと思われてるわけで……。いや……。勘違いしま

したじゃあ私の名に……」

ぶつぶつと独り言を言っている吸血鬼は、何か思い浮かんだのか爪を下げ、私の肩をぽんぽん叩いた。

「うん、いいわよ。使い魔やっただげる」

「ほ、本当!？」

私の使い魔が吸血鬼……。ツエルプスターのサラマンダーは勿論、今年一番の大物といわれていた風竜よりもすごいかもしれない。いや、そんなものとは比べ物にならないわ!

「貴女の名前は？」

「永遠に幼き紅い月、レミアア・スカーレット。貴女の血に刻んでおきなさい、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

それが、私と、彼女　レミアア・スカーレットとの出会いだった。

プロローグ(後書き)

ネタ。

第1話

あの後、先生は学園長へ報告する為、フライを使って学園に行つたから魔法の使えない私は歩く予定だったのだけれど、吸血鬼が太陽の光がダメなのをすっかり忘れていて、もやもやと赤い霧を出すレミリアにマントを被せて学園まで走ることになった。

春の使い魔召喚の儀で成功し、一応無事に使い魔を使役できたので、進級は確定……なんだけれどそれ以上の悩みが出来てしまった。その悩みの種である吸血鬼の少女　レミリアは、先ほどメイドが持つてきた紅茶を飲みながら私の部屋でくつろいでいる。その様子だけを見ると、先ほどの威圧感なんて欠片も無い。

赤い瞳にウエーブのかかった水色の髪、着ている薄桃色のドレスは見た感じ上質なものだ。そして何より特徴的なのがちらつかせる鋭い牙。

私はその牙を見て思わず先ほど咬まれた首に手をやった。既に水のメイジによって治療されているため、傷跡は無い。

「そんなに気になるの？」

「あ、当たり前でしょ！」

「ちょっと噛んだだけじゃない」

私の前で歯をかちかちと鳴らす吸血鬼に脱力感を感じた。

「ん……そういえば私はあなたの使い魔になったのだけれど、何をすればいいのかしら。私の友人は使い魔に本の整理とかさせていたけど」

友人の使い魔……ってことはメイジの知り合いがいるのかしら。それならドレスとかも納得できるかも。

そんな私の様子をレミリアは面白そうに見ていた。

「ええつと、まず使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「ふうん。で、見えてるの？」

「……見えないわね」

「あらそう。残念」

まったく残念そうにしていなのが少し腹が立つわ。

「それから、使い魔は主人の望むものを持ってきたり。例えば秘薬特定の魔法を使うときに使用する触媒。例えば硫黄とか、コケとか……」

「無理ね。というか嫌」

そっけなく言う使い魔に私は手を出したくなかったが、吸血鬼ということでぐっと抑えた。

「……最後に、使い魔は主人を守る存在であるのよ。その能力で主人を敵から守るのが一番の役目！」

「貴方は誰かに狙われてたりしてるの？」

「そういう訳じゃないわ。もしそうならって話よ」

「ふうん……でも私、日光に弱い病弱っ娘なの」

「そりゃあ吸血鬼って太陽の光に弱いつて聞いたけれど………というか病弱って嘘でしょ！」

どう考えてもさっきの動きとか行動は病弱のソレじゃない。病弱というのはちい姉様みたいな人のことを言うのだ。

「本当よ本当。屋敷の中にこもったままの引きこもり娘よ。ほら、お肌真っ白」

あんたが吸血鬼だからでしょ、と突っ込む気にもなれなかった。

「……吸血鬼なんだから強力な先住魔法とか使えるのよね」

「魔法？ まあ使えなくも無いけどそういうのは私より妹のが得意だったわ」

「妹がいるの？」

「ええ、目に入れても痛くないほどとっても可愛い妹がいるわ」

へえ。吸血鬼にもそういうのがあるんだ。

「たまに屋敷を壊したり私の体を引き千切ったりするけれど」

「妹が体を引き千切るってどういいう状況なのよ！」

「ほら、手にかかる子ほど可愛いつて言うじゃない。最近はずよくちよく私の部屋に来てくれたのよねえ」

「限度があるわ……」

「まあ、護衛くらいならやっただげる。不本意だけど契約も交わしたしね……何より契約を違えるのは私としても……だし」

「……貴方、本当に吸血鬼なの？」

吸血鬼は亜人ではなく妖魔に属しており、ハルケギニアに住む妖魔の中で吸血鬼ほど手ごわい相手はいないらしい。

なぜなら人と見分けがつかない上に血を吸う直前まで、牙さえも引っ込めておける上にメイジのディテクト・マジックはもちろん、あらゆる魔法を駆使しても正体は暴けない　とまで言われてる程。目の前の吸血鬼は露骨に正体を現しているというか、隠す気が全く無さそうに見える。それに羽が生えた吸血鬼なんて聞いたことが無い。

「あら。じゃあ私が吸血鬼じゃないとしたら何に見えるのかしら？」

「悪魔」

「そうね。以前は紅い悪魔って呼ばれてたことがあるわ」

「凄いいい二つ名ね……」

「まあ私は真正正銘の吸血鬼よ。証明する方法はあるけれど、試してみる？」

口を大きく開くレミリアに対して私は首をぶんぶん横に振った。

「あら残念」

そう言ってレミリアは空になったティーカップを置き、てくてくと私のベッドの中に入っていった　　って！

「そこ私のベッドよ！」

「いいじゃない別に。それとも何、さっき守れって言ったのに別の部屋で寝ろというの？　もしかして、そこに置いてある藁で寝ろって言うんじゃないでしょうねえ？」

「な、な、そそそんな訳ないでしょ」

「良かったわ。もし藁で寝ろと言ったら貴方の腕一本くらい頂戴するところだったもの」

「……………」

あれは確かに使い魔を召喚した時の為のもので、それこそ動物や幻獣用だ。まさか人型の……吸血鬼が来るなんて予想できるわけないじゃない。

「……………寝てるとき咬まないでよね」

「流石にそこまで寝癖は悪くないわよ、多分」

「多分って！」

「気にしたら負けよ」

ランプの灯りを消すと窓の外から月の光だけが部屋を照らす。

「月が、二つ、あるわね」

その光を見てレミリアはぼつりとつぶやいた。

「月が二つなかったら何があるっていうのよ」

「ま、多いに越したことはないわね」

「何言ってるんだか……」

変な使い魔とため息をつきながら私はベッドに入った。

二人寝ても余裕な大きさのベッドの筈なのに、やけに狭い気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987ba/>

ゼロと吸血鬼

2012年1月14日10時44分発行